



練習成果を披露する内藤さん(左から2人目)。部員が一人の部活にとっては、貴重な機会だ。

初めてのステージ、神戸学院大学での定期演奏会で得た充実感と達成感

最初は、現役部員ゼロという驚きの事実を知って入部をとまどいましたが、そのうち「いや、待てよ」と考え直したのです。現役部員は自分一人しかない。「逆に一人だからこそ、より自由にチャレンジができるじゃないか」と。そして卒業生の方々が、さっそく体験練習の場を設けてくださいました。温かく歓迎していただき、協力してくださっているプロのボイストレーナーの方からも指導を受けて、入部へと心が決まりました。

今でも印象に残っているのは、入部式で大先輩から「自分のやりたいことをやればいいよ」と声をかけていただいたこと。そのおかげか、伝統を

大先輩のことは胸に合唱への入り口を広げてめざすは部員10人

そうして始まった、たった一人の部員としての活動。2021年の夏はボイストレーナーの方とマンツーマンで、発声や表現の技術を磨く中、「バンドラ」さんの定期演奏会への出演が決まった9月からは、神戸学院大学に通って合同練習。伴奏の音源をもらって自宅でも毎日練習。英語やドイツ語のほかフランス語の曲もあつて難しかったのですが、自分の技術が上達していくのが実感でき、どんどん楽しくなっていたのを覚えています。

定期演奏会当日はグリーンクラブの卒業生の方々も駆けつけてくださり、「がんばれよ」と激励してくださいました。卒業生のみなさんは、グリーンクラブを誇りに思い、本当に愛していらっしゃるのだなということが事あるごとに伝わってきます。また、「バンドラ」の方々の関係も深まり、「次の定期演奏会も、ぜひ一緒に」と言っていただけでした。あちらのメンバーには香港からの留学生もいて、思いがけず国際交流もできています。

絶やしてはいけないという使命感はあるものの、気負いすぎることなく活動できています。合唱だけでなく、もう一つ鉄道という趣味があるのでメリハリがつけられているのかもしれない。授業、アルバイト、鉄道旅行、そしてグリーンクラブ。4つが上手くかみ合っており、とても充実した大学生活になつていっていると感じています。

今後の目標は、卒業するまでに部員を10人に増やすことです。みんなで心を合わせ、声を合わせて歌うことで一体感が得られる。その歌で聴衆の心も動かせる、そんな合唱の魅力を一人でも多くの人に知ってほしいと願っています。さらに最近、「グリーンクラブにかかわる動機は、歌だけでなく、もいいのではないかと」も考えるようになりました。たとえば、映像制作に長けた友人が、クラブのPR動画制作を手伝ってくれてもいい。グリーンクラブの活動を中心に、いろいろな可能性が広がられるはず。伝統を守りつつも、新しいトピラを開くエンターテイナーをめざして、楽しく表現活動をしていきたいと考えています。



3

グリーンクラブ

文学部 社会学科 1年次

内藤 雄基 さん

合唱大好き小学生が、中学校では吹奏楽部で県大会へ出場。高校時代の放送部では全国大会出場を果たす。これらの経験が生かされるとグリーンクラブへ入部。もう一つの趣味である鉄道旅行での目標は、日本の鉄道路線全線完乗だそう。

1951(昭和26)年に発足し、2021(令和3)年に創部70周年を迎えたグリーンクラブ。しかし、奇しくもその記念すべき年に、現役部員ゼロという危機が訪れました。合唱を愛する卒業生たちが部の存続を守るうとする中、一人の新入生がクラブに興味を示し、入部を決めました。現状を知らずに飛び込み、卒業生らのサポートを受けながらたった一人の現役部員として活動に励む、内藤さんにお話を聞きました。

伝統の継承者 であり、合唱の新しい可能性を開くエンターテイナーでもありたい



合唱から吹奏楽、アナウンスへと興味を広げ、また原点に帰ってきた

12月5日、神戸学院大学の混声合唱団「バンドラ」さんの定期演奏会にゲスト出演させていただきました。グリーンクラブに入り、唯一の現役部員として活動が続けてきて最初の晴れ舞台。「バンドラ」のみなさんとともに練習を重ねた9曲を披露し、改めて「合唱っていいな」と感じました。

自分では記憶にないのですが、幼いころから歌うことが好きな子どもだったそうです。それならばと、母が地域の合唱クラブに参加させてくれました。小学校1年から6年まで習い事のような感覚で通っていたことを覚えています。中学校では合唱部がなかったため、吹奏楽部へ。楽器は初心者ながらもチューバを担当し、2年生の時には神戸市の地区コンクールで金賞を獲得しました。

高校にも吹奏楽部があったのですが、当時はアナウンスに興味があり、放送部に入りました。自分で取材してアナウンス原稿から作成したり、ドキュメンタリー番組を制作したりと有意義な活動ができました。「音楽」や「声」で表現することを通じてきたので、甲南に進学が決まった際にグリーンクラブがあると知り、体験入部してみたかと考えていました。

現状を知らずに送ったDMからすべてが始まった

ところが、クラブ勧誘の場にグリーンクラブは見当たりにません。あるはずなのになぜだろう、と不思議



摂津祭での一コマ。左が女形を演じる成田さん。初舞台とは思えない落ち着きと仕上がりがだ。

70年の歴史が再びよみがえる歌舞伎文楽研究部、 復活劇の立役者「歌舞伎はカッコイイ」

歌舞伎文楽研究部は関西で唯一、歌舞伎を実演する部活ですが、部員がゼロとなり2年間休部となっていました。約70年の歴史をもつこの老舗クラブに入学したのが成田さんです。部員は一人ですが、周囲のサポートを得て摂津祭では公演を実現。2021年は活発な文化活動が認められ、理事長杯も受賞しました。まったくの初心者である成田さんがなぜ入部を決め、どんな活動をしているのか、歌舞伎の面白さについても語ってくれました。



4

歌舞伎文楽研究部

文学部 日本語日本文学科 2年次

成田 亮平 さん

未経験でも歌舞伎を楽しく演じられたことで、どんなことも柔軟に楽しめる素養があると気づいた。「将来どんな仕事に就いたとしても、楽しさを見つけれられるのではないかと語る。

七五調のセリフが心地よく 練習は想像以上の楽しさ

歌舞伎に関心をもったのは、高校時代に読んだ小説『カフキブ』がきっかけです。高校生が歌舞伎部をつくる物語で楽しく読みましたが、観劇までには至りませんでした。ところが入学した年の10月、新入生歓迎会で卒業生の方が勧誘活動をしており、そこで歌舞伎文楽研究部の存在を知りました。関西唯一の歌舞伎を実演するクラブで、現在は部員がゼロ。小説と境遇が似ていることに驚き、「入部すれば小説みたいでかっこいいかも」と考えました。入部の不安はありませんでした。高校で所属していた新聞部も最初は先輩一人の部で徐々に部員も増えたため、「いつか増えるだろう」と楽観的な気分でした。何より「小説と同じように歌舞伎ができる、またとないチャンスだ」と心が動きました。

現在は週に1回、師匠から90分程度指導していただいています。最初は対面で舞踊を教えてください、コロナ禍でオンライン活動になってから『外郎売』の口頭を練習し、6月からは摂津祭に向けた演目の練習に入りました。セリフは知らないことばかりで、言い回しやイントネーションが独特です。一つずつ師匠から指導を受け、動画を見ながら自主練習も重ねています。練習は大変ですが、とにかく楽しいです。七五調のセリフはリズムが心地よく、お腹から声を出すのはカラオケで歌うように爽快です。立ち回りも師匠から教えていただくのですが、二つくりアするともう一段レベルを上げて指導をしていただけるので、達成感も得られます。練習が楽しいのは師匠のおかげです。

他の部からの支援など 周囲の優しさが原動力に

入部から10か月後、2021年の摂津祭では『三人吉三白波』大川端庚申塚の場を上演しました。吉三という同じ名前をもつ三人の盗賊の出会いの場面を描いたもので、小説『カフキブ』でも主人公が最初に選んだ演目です。小説と同じ演目を演じられるというだけでテンションが上がりました。

メイクや衣裳は師匠が手配してくださり、道具やかつらは以前から部でお世話になっている企業の方にサポートしていただきました。70年の歴史を実感し、最高の環境で上演させてもらえる幸せを感じました。

もちろん私一人では上演できません。登場人物の4人は、私の友人と卒業生の方、音楽研究部の部長が協力してくれました。書類作成をサポートしてくれた学生部の職員さん、文化会をまとめる文化会常任委員会にも大変お世話になりました。公演前には、他の部の面識のないメンバーから「一人で大丈夫？」とSNSで連絡が入りました。うれしくて何度泣きそうになったことか。みなさんの温かさを感じ、甲南でよかったと実感しました。

初の舞台だったため準備に忙殺され、緊張する余裕もなく本番が始まりました。公演を見た友人からは「女形をやっていた感じがよかった」「声がよく通っていた」と褒めてもらいました。しかし、「話の内容が面白かった」といった感想はなかったため、歌舞伎の面白さが伝わり切れていないと感じました。歌舞伎を楽しむためには多少の予備知識が必要になるため、今後の課題だと考えています。

全国大会開催も目標に これからも続けていきたい

歌舞伎文楽研究部に入部後、卒業生の方をはじめ多くの方々に助けってもらい、優しさをいただいたので、それを返していこうと考えているようになりました。高校までにはなかった大きな成長です。良い出会いを経験できたのは、人と人の距離が近い甲南だからこそだと思います。

一方、他の部とかかわりをもたせてもらい、部員たちの仲の良さを見ると、寂しさも感じます。一人で活動する大変さは周囲のサポートで乗り越えられますが、仲間がいない辛さは越えがたいです。とはいえ歌舞伎は楽しくてカッコイイので、今後もしっかり続けていきたいと思っています。

目標は2つあります。自分の代では無理ですが、海外公演を実現すること。もう一つは、大学の枠を超えて切磋琢磨できるような全国大会を開催することです。そうやって実績をつければ、新入部員も入ってくれるのではないかと考えています。部員が増えれば、上演できる演目も広がると期待しています。日常では自分を「カッコイイ」と思える機会が少ないと思いますが、歌舞伎はそう感じられる非日常です。歌舞伎文楽研究部で新しい自分を発見できると思っています。

